

八代集抄

古今集二二三

八

特別

イ 4

3163

104(5)

9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4



郭公あやさ月の
あすふ乃わねく
さう綾乃ふんえ
わねとよあやめ
こいんさくあや
さ月のあやめあ
けけわ綾月と
い綿綾乃をさめ

古今和歌集卷第十一

五并一

郭公あやさ

よみ人さく

郭公あやさ月のあやめあ
けけわ綾月と
い綿綾乃をさめ

毎乃さう月乃わねくさくあやめあけけわ綾月と
綿月布月さくさくあやめあけけわ綾月と
えと月乃あけけわ綾月とさくあやめあけけわ綾月と
い綿綾乃をさめあやめあけけわ綾月と
らねをさめあやめあけけわ綾月と
めいわねわねさくあやめあけけわ綾月と
奥山乃ゆわさくあやめあけけわ綾月と



あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
のそねふされいふのつづけくさくさくさくさくさくさくさくさく
かゝりもあつた事なりまゝふふふふふふふふふふふふふふふ
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
わうまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと

あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと

あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと
あふまゝの事なりいふ事なりとありとあるが如くもいふと

いやはしけなうさ
細神乃酒乃あま
まのさけなうさ
おきつうゆきお
そく人なうさ
乃るけきハ海神
布をうさ
おきつうゆきお
沖乃海神乃うさ
ぬ玉乃乃乃乃
こころ乃乃乃乃
らん乃乃乃乃
我乃乃乃乃乃

いやはしけなうさ
あま乃乃乃乃乃
おきつうゆきお
今乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃
あま乃乃乃乃乃
人乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃
我乃乃乃乃乃
えれ乃乃乃乃
い乃乃乃乃乃
也乃乃乃乃乃
い乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃

よゝわさる乃ちいさうわれ
あひ乃身をうづなふすゝと

ひさしをいふなりと

卷之四

すゝと一に云ふより乃の事と云ふ事なり

しきとすなりは乃字より我よりなりと云ふ

安和灯り飛入るをうんとすきなり死すまで山

[illegible]

是世俗王與乃大智行主，人立立於人

に今死すといふ飛鶴の煙をみる

卷之四

よれいとうき我袖子

結乃氏中走之者ころり可法

新九思堂

いふとくも辛うさすあねを
秋乃ゆきも何やーかきり

何れとも幸ひくすのつも今幸ひくすの何れも秋の夕え
 物悲しきなりひくやととあひくすの何れも秋の夕え
 ちと文集云大倉四時心惚若就中^{テニ}出^タ腸^ハ是秋天ととりそと^ハ

秋乃田の初きうんをこひさるゝ

おとこころなむれーとせん

七五

下 進 加 了 井 乃 上 進 之 端 意 の

八
の
中
に
あ
る

子
十
五

我々を主として

卷之四

乙

是依寢と云

[illegible]

五十二

小町

[illegible]

わい〜あはれ
都るかに〜
あはれ〜
人〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

口歌

あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

わい〜あはれ
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

九に四々

あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜
あはれ〜

哥は、難波にはなれる。芦乃やもつるまおろくの世をいふ
 おころおふさうよりあなれにおろく世をいふよりわ
 家乃をこき討にいよりも野らるるまもろうわれより
 け哥は月も遠ちるま君之志を日記より松原国とつる
 とうけもなう。稲麻竹葦とうきさるま
 まもつるまもつるま

ぬききとハ我のこころを
 人忘れぬがひのふさう候へられ
 我あけきとハ我のこころを
 ぬききとハ我のこころを
 人忘れぬがひのふさう候へられ
 我あけきとハ我のこころを

ふとすく月日ふくむ白きう
ちやうとよるにさうぢやね
人忘れぬこの子に候へんれ
我あけまを我のこゝと

人たれぬらひ所てわいしきゆらう我
たれんとて思ふもききすくひまはやく

ともなり

らとくしやうくゐねいりようをせに
あふまかひよくきつてものを

子漢叔

きふをのこさぬ新^{せい}美^みあれ
わうこさるうゝん^{ゆゝい}るりるり

一子叔

いのもちふしやまかりて何とも
えとしてぬき乃とひる成るり
いふふちのつねに

ことなりやとていふね
あまのこころをさと
下は深れうきあり
こゝろにぞよき
いとぬりりちや下
にはきこえおそ
きすをのこしむね
君をさむねおきて
の夢をわれは思ふ心
乃たわひくもいにほ
し我よりいへば
ことごとくしるし
あつちもよきかり
又果ね夢のそと
名おの命よしも

いふ

ねむるはなれど
 かきくもわれと
 めもめもすうて
 おをりての春の物
 とく詠めきつ六
 春にぞひそかに
^歌
 雲ふとあやとむ
 まゐるく陰柳を
 生へるあやをまの
 物とよかりあやを
^{それこそ}
 詠ふとあや物と
 ま乃あけつとく
 うくさかやうり
 三月はしると霧と
 マコ限るとりいそ

古今和歌集卷第十三

五哥三

やよいほにちより無ひよふと
いひてほよあめ乃ちわたり
よよきくけういなる

あまひの船長

にきこせとおしきくよるをゆへ
ちる乃ものゝあつちう

三月三日と霖と云ふ事。云々所より。一春の月日。不
まゝ。随ふと。いふ。其心。一様。所。況。而。う。か。す。い。う。と。云。ふ。而。を。い。ふ。

新編

今母馬也

卷之四

山より月ありて

金史人志

あつたに

新心作

玉より玉に花を

左の事端付高別

正告す所也

たのしみなり

結の野々名をいふ

そくも所す處

とて何ぞい

あまのうへにありしとき

山あけ月乃てさうす

古今

こひくちねはるるをうけあ

出づるにあらざるもあらん

とろろもち

秋乃も名の千歳なり何と云ふ

いとも早く何ける地を

いゝもあやうけ

也独わさよ、難れどもよく是く、
中めおし人の習ひなり、
新なと、
三れり、
あう、

九河內新順

あゝもいゝもてぬじうぢり

人々乃姑めよとれそ

よふ

あめ乃くくと何々

あきねくちううま

まのめをうくそ　　あつたねくちううあき
 雲乃わううまはけ
 ゆけに割乃せぬくとさる起きとて曉をあらゆるもこの月
 もも子乃わうくと八朗を異くとみした徳すうす

とちふくちふく

口訣

書名我為

まはるゝん

ふあつたれい

今更上矣

我々もあひまゐる

こまを連へん

以上是八中人

おきなりうちまて

一、是八綱

二五ノ三ノ

何れに於て

我々各々

我々の

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a small tear near the top center. There is also a small, dark, irregular mark near the bottom center. The page is otherwise empty of text or illustrations.

乃世乃

ちとてあつけ

7600000000

款
本

嘉慶十六年

てふ

之

五松樓記

梅るれあふ

集秀齋

集秀奇十首乃

乃門之乃

くきふそと

六十六

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

سید محمد علی



さあけく天乃戸座の月影も
何うすもき子をあいえはるうを
きずるを我もいそし難波を
みゆもいそあひきるもいそ

おとり門限の方埋まゐるれそ
ふせんより砂ひえうめん

卷八

人々をいふとて、
かきあはせしむる
夢路をさへ人といふや
夢ひつゝ人の足もとに
えられん人なりとて口訣
ゆめちうりつゝ何れもやすめすべしとて
うけつゝいとめりこといふ
よみ人
おもしろく人目につく
河と見たりとてえさうわらふね

しまの歌乃とやさなをあらうと
 人めけみのせきとてひん
 寛平御時きさい乃まけ哥合の
 うゝ
 まのまのり
 くれま乃うろはいつてれぬの
 ちうろくかぢむくこゑいおぬも
 歌うゝと
 子けね
 冬乃他はすむふをふれつ書てう

うこにりり人うきと那
さうなまよく初雲乃我を
きききききききききき

上人志す

山寺乃とての
口訣

山を乃とてその山乃とよまへた
人乃とてへく我にむめり

かういふ人々乃うねめ
乃とあらず

といふ所のありは
 昼の逢うべき
 日を待つとて垣の邊
 手を置りてありけ
 海松の乃浦まゝと
 ありよし

かしよらゝ乃さふよ
 へのき乃あうれひを
 乃さるゝ乃さるゝ

平泉文

志川乃志すも
心乃うに遠く人乃同
と志乃も志す

ちり川乃ちすもいり徳信み
あれちりすちんとあて

そのり

ともいふ一ちうて
 世より賢いすまん
 と云ふいふを
 ちうてのふちうて
 下に云ふいふを
 ちうてのふちうて

あまのみなとにふりて玉のまは
しきくそねん人なまふりて
人なまふりて玉のまはにふりて

上人志

我を志のいねくは是乃
山より乃をとり出ねー

二つくふふ出とるり山とるりまの世俗より教養子といふ事あり
実乃赤き袖の髪をきれ時山髪よりすきや

人乃難而

上人志

大連はすゝめ

おろしに我名を漬こまてん

りて馬の考へて

世をうへふゝす

と海客よりよせり之

平貞文

王舟車之志

まづわふ事人にあふを

一説海の所なりと

あふせきつらふ

乃ちわすくまけしハ凌をこき出さん沖よりうてわたり人々をうへ
 こり定家言は年を只我名を凌こき出さん世を海邊よりさるめす
 くもーとふみくゆとやさるるあり一ハ海乃れり力不尺るめす
 まけしハ凌こき出さんとよめることひく傳中弘昭法師撰み回人
 にこのことをいひけん仲は玉藻をかつあひてといふ丹をう著し
 海へふとやなることりわかるむとさかり出しく傳りされとあるね
 羽衣といふところにはあらけしハれ海邊よりうて傳り人や但万葉
 土阿毛海乃一人立ち仲は浪君をさるるに云る人もあるこれ海の
 原といふたふとさかり法補胡臣奥義の事をかさ出あらうと釋之
 以彼乃人皆うなてあるなり一様所流は年我名も今もとい我
 名もといもの事人とてて可棄る海濱と云くことあり
 すうとら又云人も我意を枕あつて人知人もあるを感せざるとや
 思ふべしといふ人もあると云ふはあつて口訣

よみ人止む

風すけははるのきりの
はるのきりのねのこ
とくねうけつたて
あきねーとて様
りきをうさり
池すむ名を可名
名を可名く隠れぬ
とすれとゆかりと
あけく空地の雲の
浅き隠れりゆき
うさりてあかり名
を情とてて
何とていふれとて
あきねーはるのきりの
はるのきりのねのこ

風すけははるのきり
ねうあきねうとて
あきねーとて様
りきをうさり
池すむ名を可名
名を可名く隠れぬ
とすれとゆかりと
あけく空地の雲の
浅き隠れりゆき
うさりてあかり名
を情とてて
何とていふれとて
あきねーはるのきりの
はるのきりのねのこ

ひささるうさり
我名りまを今
さき事うさり
あきねーとて様
りきをうさり
池すむ名を可名
名を可名く隠れぬ
とすれとゆかりと
あけく空地の雲の
浅き隠れりゆき
うさりてあかり名
を情とてて
何とていふれとて
あきねーはるのきりの
はるのきりのねのこ

ひささるうさり
我名りまを今
さき事うさり
あきねーとて様
りきをうさり
池すむ名を可名
名を可名く隠れぬ
とすれとゆかりと
あけく空地の雲の
浅き隠れりゆき
うさりてあかり名
を情とてて
何とていふれとて
あきねーはるのきりの
はるのきりのねのこ

伊勢

まきうさり我名
あきねーとて様
りきをうさり
池すむ名を可名
名を可名く隠れぬ
とすれとゆかりと
あけく空地の雲の
浅き隠れりゆき
うさりてあかり名
を情とてて
何とていふれとて
あきねーはるのきりの
はるのきりのねのこ

まきうさり我名
あきねーとて様
りきをうさり
池すむ名を可名
名を可名く隠れぬ
とすれとゆかりと
あけく空地の雲の
浅き隠れりゆき
うさりてあかり名
を情とてて
何とていふれとて
あきねーはるのきりの
はるのきりのねのこ

名のいふところありて塵に^{ナリ}まじりておぼしむるに^{ナリ}

